

音楽科学習指導案

日時 平成29年5月29日(月) 5校時
児童 4年生
授業者
授業場

1 題材名 「オリジナルさくら物語をつくって演奏しよう」

2 題材の目標

日本の旋律や箏の音色に親しむとともに、箏の奏法の違いによる音の響き方やその組合せで生まれる旋律のよさや面白さを感じながら、思いや意図をもって旋律をつくることができる。

3 題材について

(1) 題材観

本題材は、学習指導要領 第3・4学年の音楽づくり ア「いろいろな音の響きやその組合せを楽しみ、様々な発想をもって即興的に表現すること」を受けて設定した。

音楽づくりのきっかけとなる「さくら さくら」は、日本古謡として昔から歌い継がれてきた日本の旋律の味わいを感じ取ることができる代表的な曲であり、テレビのBGMとしてもよく使われる児童にとって耳馴染みのある曲であると言える。今回児童と共有する「さくら さくら」の日本らしさの秘密は都節音階(ミファラシド)が醸し出す日本特有の旋律と、箏そのものの音色とし、この2つの魅力を存分に味わうことができる楽器である箏を演奏することへとつなげていく。箏は、今回都節音階に調弦し演奏させることで、失敗なくまとまりのよい旋律が出来上がると考える。

この、「さくら さくら」をきっかけに、箏を用いて音楽をつくっていく活動を設定し、自分のイメージする桜の場面を音で表現していくことを通して、同じ楽器でも強弱、旋律の動き方、音色などを変化させることを実感できるようにする。

(2) 目指す児童・生徒像

省 略

(3) 指導観

以上のことから、本題材においては、次の点に留意して指導にあたることとする。

自分の思いや意図を明確にし、対話的な学びを促進する活動の工夫

以上を踏まえ、本題材では、自分の桜のイメージが伝わるように、音色、旋律の動きなどの音楽を印象付ける要素と関係付けて考える力を高めるため、「伝わりやすさ」を追求するような題材の構成をする。以下に、研究に関わる具体的な手だてを述べていく。

本題材における「見方・考え方」と「対話的な学び」との関係性

本題材の「見方・考え方」は、桜のある風景を音楽で表現する時、様々な発想を生かして即興的に表現はするものの、なんとなくではなく、音や音楽を要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージと関連付けて表現することである。これまで学習してきた音色、メロディ、強弱などの見方を発揮しながら、即興的ながらも「この音は桜が1枚落ちる音」などと、音とイメージを関連付けながら思いや意図がある音楽になるようにしたい。

①自己の音楽に対する価値意識とその理由や根拠を他者と比較・検討する場の設定～I

児童は、いくつかの奏法の中からイメージに合うように音色や音を選択しながら短い旋律をつくっていくが、(2)でも述べたように、見方・考え方を発揮させながらイメージを音にすることは、簡単なことではなく、児童によってその差も大きい。自分1人では表現が広がらなかつたり、本当にイメージが伝わるのか不確かになったりすることも考えられる。そこで、「伝わる音楽にする」という視点を与え、他者と自分の演奏やその意図を比較したり検討したりする場を設定することで、対話的な学びが促進され、「見方・考え方」が強化されていくことを期待している。

【見方・考え方を含んだ思考や対話の例】

要素（フィルター）	見方・考え方を含む思考や対話の例
旋律の動き	「自分の音楽よりも、音が多くて、もっとたくさんの花びらが落ちているように聞こえた。」 「1枚の花びらが落ちるとき、1枚は軽いから高い音のほうがよいかな。」 「グリッサンドを使って、音を上げていくとわくわくするから咲いたように聞こえる。」
音色	「トレモロを使うと、落ちそうで落ちない花びらっぽくなるね。」 「やさしくはじくと、春のおだやかな感じが伝わってくるね。」
強弱	「さわやかな風が吹いたので、小さな音で弾いてみようかな。」 「台風が来たので、強い音に変えよう。」

4 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ア 発想を生かした表現をするために音を選択したり組み合わせたりして表現している。 イ 自分の思いや意図を音楽で表現している。	ア 奏法による音色の違いやそれらの組合せによって生み出される音楽のよさや面白さに気付いている。 イ 音楽に対する感性を働かせ、箏の音色や旋律を聴き取り、それらの働きが生み出す感情や面白さなどを伝え合いながら音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図を見出している。	ア 「さくら さくら」の特徴である五音音階や箏の音色に親しんでいる。

5 学びの過程のデザイン

下支えする主体的な学び	学 習 活 動	手 立 て
<p>・箏を都節音階に調律し、どのように鳴らしても、日本らしさを感じることができ、喜びが得られるようにする。A-①</p> <p>「オリジナルさくら物語」をつかって演奏しようという題材の課題を提示する。A-①</p> <p>・「どんな桜かな？そう思った理由になった音を言葉や形で表そう。」と発問し、箏の音色に着目させる。A-②</p> <p>奏法とイメージを結び付ける対話を通して、自分なりに奏法や音を選択して演奏する時間を保証する。B</p> <p>「どこがイメージを表している部分？」「ほんとうに伝わる？」などと発問し、より音色や旋律を妥当なものにする必要感を持つことができるようにする。A-②</p> <p>イメージと奏法を結び付ける対話を通して、再度自分なりに奏法や音を選択し直して演奏する。B</p> <p>「3人つなげてもよく伝わるだろうか。」と発問することで、一人一人の表現をより際立たせたり、強弱を見直したりする思考を促す。A-②</p> <p>鑑賞会に向けて、自分の音楽や、つなげたときの音楽について、再構成・吟味する。B</p> <p>「グループの工夫はどこか？またそれによってどのように感じるものができたか？」と発問し、奏法や要素に着目しながら聴くよう促す。A-②</p> <p>題材を通して考えてきた、箏の奏法の違いによる音の響き方やその組合せで生まれる旋律のよさや面白さについて、再度振り返る。B</p>	<p>1 時間目</p> <p>・楽曲との出会い。 ・「さくらさくら」を箏で演奏し、楽曲を特徴づける箏の音色や五音音階を感じながら日本らしさの秘密を探る。 主ア</p> <p>2 時間目</p> <p>・勘所となる箏の奏法による音色の違いを聴き分けて桜のイメージを持つとともに、イメージの根拠となる音色を言葉や形で表す。 思・判・表ア</p> <p>3 時間目【本時】</p> <p>・他者との対話を通して、自分のイメージがより伝わる音楽にする。 思・判・表イ</p> <p>4 時間目</p> <p>・他のグループと聴き合いながら3人でつなげて演奏し、自分たちのイメージがより伝わる音楽にする。 知・理ア</p> <p>5 時間目</p> <p>「オリジナルさくら物語」の鑑賞会をする。 知・理イ</p>	<p>自らが聴き取った音色の違いによる音を言葉や形で表したものが妥当であるか、また音色の違いによるイメージについてグループ→全体で比較・検討し、共有することで、自分の音楽をつくる際に生かすことができるようにする。 I</p> <p>表現の幅を広げたり、表現の妥当性を確かなものにしたりするため、グループでお互いの演奏やその根拠を聴き合い、比較・検討する。 I</p> <p>表現の幅を広げたり、表現の妥当性を確かなものにしたりするため、他のグループとお互いの演奏やその根拠を聴き合い、比較・検討する。 I</p> <p>各グループの表現方法とそれによって感じたことを、演奏者と聴取者がお互いに交流する。 I</p>

6 本時について（3 / 5 時間目）

(1) 本時の目標

音楽に対する感性を働かせ、箏の音色や旋律を聴き取り、それらの働きが生み出す感情や面白さなどを伝え合いながら音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図を見出すことができる。

(2) 本時における研究の視点

本時においては、「対話的な学び」の中で「見方・考え方」を発揮し、さらに鍛えていくための工夫を以下のように位置付けていく。

～自己の音楽に対する価値意識とその理由や根拠を他者と比較・検討する場の設定¹

「イメージが強く伝わる音楽にしよう。」という本時の課題を設定することで、音色、旋律の動き方などの見方・考え方を発揮しながらグループの友達と音楽を聴き合い、音楽のどの部分が伝わるのか、その根拠も伝え合う。また、自己の感性を働かせながら、それらがどんな音楽を生み出すのか伝えたりすることで、見方・考え方をさらに鍛えていく。

(3) 本時の展開

学習活動	主な働きかけ・手立て	【評価】 個に応じた指導 (▲)
<p>1 前時までの活動を振り返り、奏法や旋律が生み出すイメージが変わったことを想起するとともに、伝わりやすさを追求するための課題と本時の見通しを持つ。</p> <p>前の時間は、「グリッサンド」「スタッカート」「トレモロ」「オシテ」を聴いて、桜のイメージを膨らませ、それらを使って自分のさくら物語をつくっていた。</p> <p>よりよい音楽はA?B?</p> <p>Aの方は、音が多いからたくさんの花がちっぺいするように聞こえる。</p> <p>Bの方は、最初のトレモロが、散りそうで散らない感じを出している。</p> <p>音を工夫して、イメージが伝わる音楽にする必要があるね。</p> <p>自分一人だけでは、伝わるかどうかはわからない。</p>	<p>○2つの音楽を提示し、どちらがよりよく感じるか、その理由を考えさせ、旋律の動き方や音色を工夫することで、イメージがよく伝わる音楽にする必要があることを実感させる。 A-②</p>	
<p>グループで聞き合っ、イメージが強く伝わる音楽にしよう。</p>		
<p>2 イメージが強く伝わる音楽になるように、3人グループで、一人一人の音楽を検討する。</p> <p>「七七八」よりも低い「五五六」でメロディを弾いた方が切ない感じが表れているね。</p> <p>「かなしい桜」だから、弱く弾いてみたらどうかな。</p> <p>「一気に散る」イメージに合うように、グリッサンドのスピードを早くするとよいかもしいね。</p> <p>「満開」のイメージに合わせて、何回もメロディを繰り返しているところが伝わるよ。</p>	<p>□友達の演奏を聴いて、どの部分が伝わるのか、または伝わりにくいのか、その理由も交流する。また、音楽が出来上がっていない児童には、イメージを聞き出しアドバイスする。 手立てI</p> <p>○個やグループに「どこが伝わりやすい?」「なぜ?」などと問い、一人一人が根拠を明確にできるようにする。</p>	<p>▲活動が停滞している児童には、友達の考えを聞いて、納得できる部分はどこ? などと問い、考えていることを教師が言語に直してやる。</p> <p>【思い～付箋の記述・ワークシート】</p>
<p>3 アドバイスをもとに、自分の桜のイメージが一番伝わるように、自己で再構築する。</p> <p>友達からもらったアドバイスを組み合わせよう。</p> <p>友達のアドバイスを聞いて、イメージがもっと詳しくわいてきた。</p> <p>4 音楽が変わったり、前回考えられなかったが出来上がったりした児童の音楽の変容を全体で交流する。</p> <p>前の音楽よりも、今の音楽の方が、伝わる。</p> <p>○○さんのアドバイスで、いい考えが浮かんだ。</p>	<p>□イメージと奏法を結び付ける対話を通して、再度自分なりに奏法や音を選択し直して演奏する。 B-①</p> <p>○前回できていなかった児童や、楽譜が大幅に変わっている児童の考えを、全体交流の中で引き出し、変容を実感させる。</p>	<p>▲活動が停滞している児童には、友達に教えてもらったことを振り返らせ、使ってみたいことを問う。</p> <p>【思い～ワークシート】</p>
<p>イメージに合わせて強弱や音色、旋律の動き方などを工夫することによって、本当に音楽の伝わり方が変わることにつながる。</p>		
<p>5 本時の学習を振り返り、次時への見通しを持つ。</p>	<p>○3人でつなげて演奏しているグループがあれば、全体で取り上げる。</p>	